

# 2014年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量							価 格						
	生産	輸 入			東京		家計消費 生(%)	在 庫	輸 入			東京		消費支出 生(円)
		活	化比*	冷比*	生車	冷輸入			活	化比*	冷比*	生車	冷輸入	
25	17.3	1.5	3.0	187.7	0.4	10.6	1,702	63.7	2,572	2,338	1,131	5,396	1,429	3,054
26	16.4	1.4	3.0	162.7	0.5	9.5	1,330	65.6	2,597	2,162	1,328	5,200	1,671	2,958
%	95	92	100	87	113	90	78	103	101	92	117	96	117	97

年	輸 入 国 (冷エビ類)													調 整 品
	中 国	ミヤ ン マ	ベト ナ ム	タ イ	フィ リ ピ ン	インド ネシア	イン ド	グリー ン ランド	オース トラ リア	カナ ダ	イタ リ ヤ	ロシ ア	アルゼ ン チ ン	
25	14.5	6.2	34.3	20.4	2.4	32.3	31.5	3.7	1.6	4.7	1.7	6.1	14.6	45.7
26	11.7	5.6	31.4	11.9	2.6	25.8	30.7	2.9	1.0	5.2	1.0	6.3	15.4	36.9
%	80	91	92	58	111	80	97	77	63	111	62	104	105	81

## 輸 入 の 動 向

26年の冷凍エビの輸入量は、16.3万トンで引続き前年（18.8万トン）を下回った。本年は、EMS (Early Mortarity Syndrome) 騒動の中で、バナメいの生産回復（他の東南アジア各国は回復しつつある）がみられないタイからの搬入減少が大きく影響している。

世界の養殖エビ生産の70%以上を占め、ブラックタイガー（BT）を需要面においても凌駕するようになったバナメいは、アジア地区を中心として、生産規模の拡大もあって、その優位性が更に顕著になっていた。しかし2012年に発生したEMSにより特に2013年には東南アジア諸国において大きく生産を落とした。こうしたEMSの世界的な拡大は、特にバナメいの生産ウェイトが高い主要国では大きくエビ生産量を落とした。病気に強く、生産速度が速いといった従来にない特質の中でBT生産を凌駕するようになったバナメいは、EMSの発生によりこうした特徴を生かすため生産体制の見直す事態にまで追い込まれた。病気の発生当初比較的楽観的な見通しがあった業界も有効な対策が、発生から1年以上経っても発見できなかったこともあり、タイのようにエビ生産の大半がバナメイである国では輸出量が引続き本年も激減している。

とはいうものの、末端小売りでのバナメイ主流の扱いには変化がない現状に変わりはない。

昨年11年振りに1,000円台に戻した冷凍エビ輸入価格は、1,328円で前年（1,131円）を上回り、2年続きの高騰となった。BT、バナメいの生産地価格の高騰・乱高下、円安が原因である。

26年の為替相場（対ドル）は、年初の103円から始まり、2月、3月102円、4月103円、5月、6月102円、7月、8月に103円と小幅の上げ下げがみられたが、9月107円と急激に円安が進行し、10月108円、11月116円、12月119円と円安が進行した。特に10月末に決定した日銀の追加金融緩和政策もあって11月以降の円安進行は極端であった。

主要輸入国は、昨年が続いてベトナムが3.1万トン（前年：3.4万トン）で、次にインド3.1万トン（前年：3.2トン）、続いてインドネシアが2.6万トン（前年：3.2万トン）であった。一昨年までトップであったタイは、1.2万トン（前年：2万トン）でEMSによる生産が減から回復はみられない。また中国は1.2万トン（前年：1.5万トン）であった。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、昨年にも増して現地での好漁もあってアルゼンチン産が席卷し1.5万トン（前年：1.5万トン）と引続き高水準であった。ロシアは6.3千トンで前年（6.1千トン）をやや上回り、カナダとグリーンランドがそれぞれ5.2千トン（前年：4.7千トン）、2.9千トン（前年：3.7千トン）とカナダ増加、グリーンランドが減少した。

また、近年製品需要の伸びも若干停滞気味になっていた調整品の輸入量は、3.7万トンで前年の4.6万トンを引き続き下回った。エビ調整品（スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等の衣付き等）は依然タイから1.7万トン（前年：2.4万トン）と最も多いが2年続きで数量を大きく減少、ベトナム1.1万トン（前年：1.2万トン）、インドネシア0.5万トン（前年：0.6万トン）、中国0.4万トン（前年：0.5万トン）で各国とも若干減少させているが、本年も昨年同様タイのバナメイ減産の影響が調整品にも反映した。

## 在庫量

本年の在庫量は、6.6万トンと前年（6.4万トン）をやや上回った。

本年も冷凍エビ輸入量は引き続き前年を下回った。国内販売価格は、前年後半来の高値を踏襲しスタートし、3月以降やや下げたが、ジリ高が続き年末には再度高値になった。

本年の冷凍エビ在庫は、越年の6.8万トンとほぼ前年並みの高水準から出発した。年初1月は搬入も多かったこともあって前年を上回る在庫であったが、その後は搬入も少なくなり初夏から夏場にかけて総じて少ない在庫量となった。その後9、10月と国内搬入が前年を上回り、高値による販売不振もあって総じて下半期は在庫が膨らんだ結果、越年在庫は、6.9万トンほぼ前年並みとなった。近年在庫水準の低さが恒常的になっていたが、2年に亘る産地価格の高騰により販売不振も反映し、本年も5万トン台が夏場に2月あったのみで、その後は各月とも6万トン台の在庫であった。

## 消費地入荷量と価格

26年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1万トンで前年（1.1万トン）を下回り、依然入荷の減少傾向が本年も続いた。

本年の東京消費地価格は1,671円で前年（1,429円）を上回った。これは入荷の大半を占める輸入冷凍エビの価格の高騰が齎したものであるが、一昨年に比べると実に40%以上の上昇となっている。

本年のエビを巡る特徴は、①本年は前年末の急激な円安の中新年を迎えたが、より一層の円安が進行し、周年を通じて為替円安（平均1ドル＝106円、前年：98円）傾向が昨年以上に顕著で、産地価格の下落にも拘らず、搬入コストも嵩み買い負け現象もみられた、②アジアの産地価格は昨年史上最高の高値を記録したが、本年は一転下げ相場になり、一時年末に養殖BTのインドネシア物（16－20サイズ）が14ドル/kg台にまで急落した、③一昨年来のEMSの発生・拡大によってバナメイの生産の世界的な減産傾向もタイを除くとやや回復傾向がみられたこと、④米国の好景気＝消費の底堅さ、中国の旺盛な消費重要の一方、為替円安の一層の進行もあり、買い負けは続いた、⑤BT、バナメイとも2年半に亘る産地価格の暴騰、暴落の中で、国内マーケット縮小も進み、国内販売価格の極端な上昇は出来ない状況になり、家計消費も数量が前年を20%以上下回った。金額では高値により前年に比べ微減であった、⑥今年も搬入が引き続き増加したアルゼンチン赤エビの販売が、エビの目玉商品として目立って多かったが、国内相場は暴落した（生食系海老のため、劣化、保管等の問題がある）、⑦国内エビマーケットは縮小傾向にあるが、量販店を中心に安全・安心の動きが強まり、近年PB商品への指向が強まっている、ことなどである。